

【巻頭随想】

日本ブドウ・ワイン学会2022 甲府大会に寄せて

あんぞう  
安蔵 光弘

山梨県ワイン酒造組合会長／メルシャン株式会社 シャトー・メルシャンGM

On the Occasion of ASEV JAPAN 2022 Annual Meeting in KOFU

Mitsuhiro ANZO

Yamanashi Prefecture Wine Manufacturers' Association / Château Mercian, Mercian Corporation

日本ブドウ・ワイン学会2022甲府大会が、山梨大学を会場に開催されます。山梨県は、明治初期以来のワイン醸造の歴史があり、ブドウ栽培とワイン醸造が重要な産業になっています。現在山梨県内には93のワイナリーがあり、日本全体の約4分の1が集中しています。GI山梨（ワイン）は、2013年7月に国税庁長官の指定を受け、日本のワイン生産地で初めてのGIとしてスタートしました。ぜひ、学会の前後に、山梨県内のワイナリーをご訪問いただければと思います。

この稿を書いている時点(2022年3月)で、コロナはなかなか終息の兆しが見えていません。こういった中、山梨県内のワイナリーばかりでなく、日本全国の日本ワイン生産者は、イベントや販売促進策が実施できず、苦戦している状況です。もちろん、各大学や研究機関でも、研究環境などに多くの制限があり、これまでと違った日常を送っていると思います。

以下に、松下幸之助さん(1894-1989)の言葉を引用します。現在のわれわれにとって、とても大事な箴言です。

船を沈めてはならない

大切なことは、うろたえないことである。あわてないことである。うろたえては、かえって針路を誤る。そして、沈めなくてよい船でも、沈めてしまう結果になりかねない。すべての人が冷静に、そして忠実にそれぞれの職務を果たせばよい。ここに全員の力強い協力が生まれてくるのである。嵐のときほど、協力が尊ばれるときはない。うろたえては、この協力がこわされる。だから、揺れることを恐れるよりも、協力がこわされることを恐れたほうがいい。(道をひらく、1968)

まさに、現在のコロナ禍は、未曾有の「嵐の時期」です。日本ワインの産業を含めて、大学、研究機関とも苦しい状況の中にいます。こういう苦しい時期だからこそ、うろたえず、あわてずに、各自のすべきことを果たすことが大事ということです。これまで先人たちが築き上げ、近年注目をあびてきている、「日本ワイン」という船を沈めてはいけません。こういったときほど、協力が尊ばれます。アフター・コロナの展開を見据えて、準備をしたいと思っています。ブドウ栽培と、ワイン醸造に関する研究は、ひとえに品質の高いワインを実現することが目的で

す。こういうつらい時期だからこそ、研究者・技術者で協力し、産・官・学の協働体制を意識して、日本ワイン発展のために力を尽くしましょう。

今年の日本ブドウ・ワイン学会甲府大会が開催されるころには、コロナの感染状況が改善し、ワインを飲みながら、日本ワインの未来と、日本ブドウ・ワイン学会の将来を、みなさまとじっくりと語り合えることを願っています。